
真選組といっしょ

March

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真選組といっしょ

【Nコード】

N5718G

【作者名】

March

【あらすじ】

ひよんな事から、銀時と神楽が真選組に住み着く事に。コレ、どうなっちゃうの？（内容はとにかく神楽受け。少し大人目です。）

急遽・お願いしますうつ

今日も良い天気だった。

真選組本部居間。

近藤、土方、沖田の目の前には机をはさんで土下座する3人の姿があった。

「どーっかお願いします」

「言われてもなあ…」

ぽとりと土方の唾えているタバコから、灰が落ちる。

吸い始めたばかりなのにもうこんな短くなってやがる…。

土方十四郎は考える。

今日は日曜だった。久しぶりの仕事休暇の日だ。

まあ何事もなく、いつも通り沖田に殺されかけ、山崎をしかり、ゆったりした休日をごすはすだった。

万事屋^{ばんじや}が来るまではー。

近藤は慌てつつも、笑顔を浮かべて言った。

「まあまあ、頭を上げて。お願いしますってのは何の事だ？」

「聞いて驚けよ…」

土下座する中心にいる天パの男、坂田銀時がゆっくりと頭を上げると同時に、茶台に片足を乗せて叫んだ。

「うちがリフォームする事になったんだあああああ!!」

遠くで刀の素振りをする隊士達の掛け声が聞こえてきた。

数秒、静かになった居間の空気は土方の言葉によって動き出した。

「で？何だてめーら、実は自慢に來ただけか？リフォームするから遊びに來いって？」

「バカヤロおめー、その逆だ」

「逆だあ？」

銀時は目を伏せ、ため息をつく。と茶台から足を下げ、正座に直った。

「リフォームする期間、部屋に入れなくなった。ここに住まわせてくれ」

「あーあー、なんだなんだそういう事かよおめー…ええええ!？」

遠くで刀の素振りをする隊士達の掛け声が聞こえてきた。
またもや、口を開きづらい雰囲気になる。

「ねー銀ちゃん、足痛いアル、正座やめよーよ」

「神楽ちゃん!! 雰囲気ぶち壊しだよ! 一応僕ら頼む立場にいるんだからね!」

妙に重たい空気を平然と破壊した神楽は「よっこらせ」と足を崩す。
新八はどうしようもないという顔でそれを見つめる。

「ん? 君がいるってことは、新八君…」

近藤は何かに気がついたように、ハッと新八を見る。

そして右手でこぶしを作り、一気に上へと持っていった。

「お妙さんも一緒なんだねー! ひゃっほう!」

「あ、僕は2人の付き添いで来たんです。(どうせまともな願い方
できなそうだから) 今日で帰りますよ。実家あるんでちゃんと」

一刀両断。

勝手に上がった近藤のボルテージは一気に下へと下がっていった。振り上げたこぶしを静かに下へ下ろすと、近藤はその場で声もなく涙を流し始めた。

「で？なんで俺等なんだよ、他に当て無かったのか？」

近藤は置いていて、土方がため息混じりに話し出す。

「だってここ、広そうだし快適だし飯もいっぱい出そうアルよ！」

「……………」

元気に回答してくれたのは神楽だった。

もう充分、住み着く気らしい。

「甘えなチャイナ…俺らの寝床はそんな安くねえぜ…一泊五万円だああ」

「おいしいい！いつから真選組はホテルになったあああ！！」

総悟…お前、嬉しいだろ？

土方は横目で沖田を見て思った。

見てれば分かるが、あいつは万事屋のチャイナ女に好意を抱いていた。

「どーよ。2人位余裕だろ、こんな広いんだし」

この天パ野朗の言い方には少し腹が立つが、沖田は賛成、近藤は……。

土方は伏せた目を開くと、「静かにするなら構わん」とだけ言って

居間を後にした。

居間からは歓喜の声が聞こえてくる。

ああ、どうか後悔しませんでした。

そう思い、土方は渡り廊下から空を見る。

「あっち！」

吸っていたタバコの灰が、首元に落ちる。

「……ちくしょー……」

充分短くなったタバコを土方は庭に捨て、部屋に向かった。

1：土神

真選組隊士に万事屋が数日間泊まる事を告げて、悲しむ者や激怒する者は居なかった。

「お気楽な隊アルな、ここは」

「で、何だ何してんだお前」

こめかみに青筋を通らせている土方の隣には、飄々とアイスをかじる神楽の姿があった。

「静かにしてるアルよー」

「気が散る、すごい気が散る」

「集中！」

「お前が言っなあああ！！」

さつきからこんな感じの会話ばかりだ。

土方は山積みの仕事を一向に進むことが出来なかった。

万事屋の2人がここに泊まってもう2日目だが、やはり普段の生活とは違う。

自分のタバコ臭い部屋に、こんな少女がいるのがまずやりにくい原因だ。

慣れてないのもあるが、やはり緊張する。

な…何考えてんだ俺…！

ぶんぶん頭を左右に振ると、きりりとした表情で土方は机に向かいなおした。

「暇ヨゝ遊んでヨゝトツシートツシー」

「だあああああつうるせえ！静かじゃないじゃん！全然静かじゃないじゃん！」

「今日銀ちゃんもマダオと飲みにつちゃって、暇なんアルよゝ」
「知ったことか！」

ちえつと神楽は舌を鳴らすと、食べ終わったアイスの棒をゴミ箱に捨てた。

神楽が黙り、静けさが戻った今の内に土方が書類に書き込みをしよ
うと筆をとる。

瞬間、背中から重力を感じた。

「…！？」

嫌な予感がし、勢い良く後ろを振り返ると5cmもないのではない
かと言う距離に神楽の顔があった。

「ぬおおおお！？」

「ねーったらゝ遊ぼうヨー」

背後から土方に体重をかけてくる神楽が、首周りをぎゅっと抱きし
めてくる。

土方の心臓は今までにないほどに動いていた。

お、落ち着け、こんな子供^{ガキ}…！

頭では分かっている。

神楽の髪の毛からするシャンプーの香り。

真っ白で柔らかい透明肌。
耳に当たる息。
全てに体が反応してしまう。

もう駄目だ――

「恨むんなら自分を恨めよ……っ！」
デメエ

何かが切れる音と同時に、土方は神楽の細い腕をつかみ抱きしめた。
神楽は驚いたように固まり、身動きをとらない。

「トッシー……？」

土方は神楽をゆっくりと放し、静かに向き合う。

こんな子供に――くそ。
ガキ

神楽にそつと顔を近づける。

それ以上は何も考えず、静かな空間で目を閉じる。

「へーい！神楽ア銀さんやったよ、パチンコで当たっちゃったよ、最高だよ！」

ノックもせずに銀時が勢い良く部屋の扉を開けて入ってきた。と同時に、コンマ3秒でキスをする体勢の神楽と土方を見つめる。

「あ、銀ちゃん」

一瞬、固まる空気。

土方が大量の脂汗を流しはじめる。

銀時は静かにパチンコで取った商品を置き、洞爺湖を腰から抜き出す。

「ごめんねえ……そうだよ、銀さんが付いてなきや神楽ちゃん可愛いもんね……。こんな野獣と２人きりにした俺が悪いんだよねええええええええええええ！！」

「どわあああああああ！」

風を切る速さで土方に襲い掛かる。

土方は神楽を放し、そこにおいてあつた刀で身をかばう。交わる洞爺湖と刀。両者、一歩も力をぬかない。

銀時は今にも爆発しそうな、鬼の形相だ。

「待て待て待て待て、別にいやらしい事は（少しは考えたけど）何もしてねえから！」

しどろもどろ土方が銀時をなだめる。

「そうなのお？神楽…」

銀時がゆっくりと神楽の方を見る。

神楽は変わらず、きよとした表情で言った。

「トツシーに襲われそうになってたアル」

「何でこういう時だけノリ良いんだよおおおおおおお」

結局、土方はかすり傷と腕に包帯物の怪我を作っただけだった。
一瞬だとは言え、道を間違えた土方は思った。
とりあえず今回の事件で土方の女嫌いは、より激しくなっ
て行ったのである――。

2：沖神

早朝6：30――。

いつもより服や髪の手入れを念入りにすます沖田。

今朝も鏡の前で笑顔を作った。

「気持ち悪い」とは思うが、今はそう。彼女がいる。

普段のように気の抜けた生活を見せるわけには行かない。

「ここはやっぱキメとかねえとな……」

「ぎゃああああああああああああっ!!」
「……………」

女なら「きゃー」とか「さいてー」とか言ってみろよ。

沖田の目の前にはバスタオルを体に巻いた神楽の姿があった。

偶然開いた扉の先に居たのだ。俺は悪くない。

今朝も刀の素振りや朝稽古をすまして、汗を流そうと思って入浴場に來たらコレだ。

別に嫌じゃないけど。

何故って。

まさに今風呂上りだと主張するぬれた髪の毛から、体に滑り落ちる水滴。

バスタオルでは隠しきれしていない部分が目に付いて離れない。いや、実にそそられる。

「いやいやいやいや」

しつかりしろ、と自分をなだめると入浴場に入る。

「ちょ……！何で入ってくるアルかああ」

投げる物もないので、睨みだけを利かせ神楽は怒鳴る。

「仕方ねえだろイ。男湯しかねーんだから。安心しろ、そんな貧乳見ねえよ」

「死ねえええええええ」

こんな時間に入るなよ……。

沖田は心底そう思った。

冷静でいられるのは表面だけだ。心臓の高鳴りようが半端ない。

沖田は目を伏せながら神楽とは反対側のロッカーに衣服を入れる。神楽は沖田を気にしながら、服を着始める。

このままやり過ごそう、沖田がそう思ったとき――

廊下から数人の男の声が聞こえてきた。

朝稽古を終えて、沖田同様汗を流しに来たのだ。

「！」

沖田は瞬時に慌てる神楽の腕を引っ張ると、個室のシャワールームに入り、薄いカーテンを閉めた。

同時にがやがやと隊士達が入浴場に入ってきた。

どうやら気付かれていないらしい。

それぞれが服を脱ぎ、風呂に入ったらここから出よう。沖田は思った。

そして目の前の状況に気付かされる。

神楽を片手で抱くようにして沖田は小さなシャワールームの中に居た。

しかも神楽は下着姿だ。

自分はまだワイシャツを着ているのに。

「……………」

居心地が悪そうに、恥らうように神楽はもぞりと動く。

しかしこの状況だ。見つかったらとんでもない。

隊士達は自慢話や世間話をしながら脱衣している。

早く――

早く――！

隊士達が風呂に入り、とたんに空気は静かになった。

少し香る汗の匂いがつんと鼻をつついた。

「……………」

ゆっくりと神楽の方を見ると、沖田を見上げる神楽と目が合う。
逸らそうとするが、体が言うことを聴かない。

神楽の髪の毛から沖田の手首まで、水滴が静かにしたる。

シャツ

勢いよくカーテンを開けると、沖田はやさしく神楽を放した。

「悪かったな……」

「うつん……」

両者、ぎこちない雰囲気で着替えに戻る。

危なかった――。

沖田はため息を付いた。

もう少し隊士達が風呂に入るのが後れたら、神楽を我の物とする所だった。

「じゃ、じゃあ……」

神楽がいつも通りの服を着て、ぎこちない動きで入浴場の扉に向かった。

沖田はそれを見て、くすりと暖かい笑いを浮かべた。

「チャイナ」

「えっ」

「お前、やっぱり貧乳だよ」

「は……」

「いってー」

夕方。沖田は自分の部屋に戻り、神楽にはたかれた頬に手をやった。きつかった。かなり痛かった。

当然か、と微笑を浮かべると今朝のように鏡の前に立つ。

髪の毛ぐちゃぐちゃ。

ワイシャツにもしわが出来ている。

でも

「焦るこたあ、ねえよな」

アイツもまだまだ、ガキなんだし。

今は全然まだコレで、楽しい訳だしー。

3：銀神

銀時と神楽が隊に泊まり始め、早4日目。
朝。新八が隊本部にやってきた。

「お登勢さんからの伝言です。銀さん達、明日には帰れるそうですよ」

居間でくつろぐ銀時に新八がそう告げる。

「へー、そう」銀時が読んでいる雑誌のページをめくりながら適当な返事をする、近くで寝そべっていた神楽が勢いよく上体を起こした。

「や…やだっ」

神楽からの思ってもいなかった台詞に、銀時はページをめくる手を休め神楽の方を見る。

神楽は今にも泣き出しそうな潤んだ瞳で、新八の方を向いていた。

「え、神楽ちゃん…？帰りたくないの？」

「帰りたくない…アル」

「……………」

緊迫する雰囲気。

神楽は息苦しいように黙って立ち上がると、そのまま足早に居間から出て行ってしまった。

「ちょっと、何かしたんですか銀さん」

「なーんで俺がアイツになんかしなきゃいけないの」

「帰ったら往復ビンタ100回とか」

「恐ろしい発想はやめてくれる、新八君」

「それじゃあ何で…」と新八は考え出す。

銀時も雑誌に目を落としたまま、考えを巡らせた。

リフォームも喜んでいたし。

あっちには定春もいる。

こんな男だらけのむさ苦しい隊ともおさらばなのに。

「……………」

思い当たることが一点ある。

だが、まさかそんな。

あの神楽が。

新八を見送った後、銀時は貸されている部屋に戻った。
ふすまを開けると、そこには体育座りで小さくなった神楽の姿があった。

居ると分かっていた。

神楽は寂しい時、1人じゃられない子だから。

「なんで帰るの嫌になった？」

「……」

優しく話しかけるが、神楽は両足の間にうずめた顔をあげようとしていない。

銀時は、聞こえないようにため息を付く。

「帰ると寂しい？」

銀時が再度聞きなおすと、神楽は凶星を食らったように静かに顔を上げ、頷いた。

目は先程同様、潤んだままだ。

「やだよ…まだ皆と遊んでたいアル、楽しかったんだもん…」

やっぱりね。

銀時の予想と神楽の返答が見事に一致した。

長い時間、この隊に居れば居るほど神楽からの隊士達への愛情は大きくなっていった。

まるで子供が静かにだだをこねているようだ。

しかし――。

銀時にとっては、何1つ面白くないことだった。

「銀さんは嬉しいけどな。またあつちで神楽と2人になれるんだか

ら」

「……銀ちゃん」

本音を少し出してみる。

銀時としては、いつまでも野獣の集う男の園に、こんな可愛い神楽を置いておきたくない。

心配で堪らないのだ。

それでもまだ渋っている神楽を困った表情で見つめると、静かに神楽のそばへ近づき片手を握った。

まだこんな小さい手。

こんな小さい、幼い子を自分が愛すなんて。

「家に戻っても変わんねえよ、あいつらには何時でも会えんじゃねえか」

「……でも」

「遊びたいなら遊びたいって、またここに来て言えば良いだろ」

「……」

「それでも駄目なら、銀さんがあいつ等こらしめてやるから」

「……」

神楽は考えた。悩んだ。

離れたくない、その神楽の気持ちが銀時には伝わってきた。

ああ面白くない。

こんな所で易々と盗まれてたまるか――。

「帰ったら酢昆布1年分、買ってやるから」

「ええええまじアルかああああああ！帰ろう銀ちゃん！――」

……………え。

駄目元で出した最終手段が、銀時のどんな優しい言葉よりも神樂の中で響いた。

今まで落ち込んでいたとは思えないほどの笑顔で神樂は立ち上がる。

「いつまでもこんな所には居られないネ！ほらさっさと帰るアルよ！」

「ちょ、ま…！明日だからね、帰るの明日だから神樂ちゃん」

「根性なしがああああ酔昆布が私を呼んでいるアルよおお！」

「帰りたくないって泣いてたの誰だコラア！何で急にそんな変わっちゃうんだコラア！」

酔昆布の名前をあげただけで。

多分、今神樂の心の中で真選組の奴等は1に値する大きさだ。もしかしたら0かも。

歓喜の声を上げてはしゃぐ神樂を見上げ、銀時はため息をこぼす。

とりあえず成功した。

少し複雑な気持ちだが。

とりあえず。

「やっぱり」

神樂には、あの馬鹿みたいな笑顔が1番似合うんだ。

突然・有難うございましたああ

昨晚、銀時は食事の席で明日帰宅するということを隊士達に告げた。土方は少しの間黙って「そうか」と答えた。

沖田は何も言わず、ただ顔を伏せて食事を進ませていた。

近藤はというと、妙が来ないことを嘆きやけ食いをしていたのだった。

この4日間、隊士達と存分に遊んだ神楽。

別れるのが辛いのは隊士達も同様だ。

中には泣き出すものもあり、どこか悲しい隊での最後の食事を過ごした。

「やっぱり私が居ないと皆駄目アルねー」

「はいはいはいこっちは清々しますよ」

出立の朝。

土方は銀時と神楽の見送りをしていた。

「そーんな事言つてえ多串君、うちの神楽ちゃん襲つてたじゃないですかあ」

「何処のババアだてめー。そのネター生引きづる気じゃねえだろな」

ため息を付く。

別れの時までこんなテンションかよ。

土方がボソリとそう言つと、神楽が覗きこむように顔を近づけた。

「別れじゃないアル！またいつでも来るからナ！」

すぐに銀時が神楽を抱っこして、土方から離れさせる。

もう近づくだけでも土方に警戒している様だ。

ふと土方は思った。

自分は結構寂しがってるんじゃないか、と。

証拠に、神楽の言葉に嬉しさを感じてしまったからだ。

「お世話様でしたー」

適当に言つて銀時が歩き出し、神楽も後を追う。

ああまた平穏な日々が戻ってきたのか。

とりあえず、後悔はしなかったーな。

「トッシー！」

隊に戻ろうとする土方を神楽が引き止める。

そして叫んだ。

「クソ沖田に私は美乳だって伝えといてネー！」

「!?!?!」

今日も良い天気だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5718g/>

真選組といっしょ

2010年10月13日17時47分発行